魔法少女☆ゼロ魔★マギカ

あるすトロメリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女☆ゼロ魔★マギカ

【Ｎコード】
Ｎ３３７６Ｔ

【作者名】
あるすトロメリア

【あらすじ】
ゼロ魔にＱＢがやってきた

（前書き）

２ｃｈゼロ魔スレで思いついた一発ネタ

少年と女が寄り添いあうように息絶えていた。
このあたりではあまりみない、黒髪に黄色い肌の少年だった。片割れのほうは大人びた曲線の肉体をしているが、顔立ちは歳若い少女のものだ。艶やかな金髪の中から尖った耳が飛び出している。
少年の身体は傷だらけだった。腕はボロ布のように千切れかけ、はらわたは真っ黒に焼け爛れ、両目は深い裂傷によって潰れていた。他にも数え得るのも馬鹿らしいほどの傷と血でまみれていた。それでも、少年の手には強く一本の剣が握り締められている。かつては雄弁に言葉を発していたその剣も砕けて物言わぬがらくたと化していた。そんながらくたでも、少年にとっては最後の武器だったのだろう。共に戦ってきた戦友の残骸だけが。それを握り締め、最後まで戦ったのだ。腕がもげても、目が潰れても。背後の少女を守るために。
少女は胸に大きな傷がある以外は綺麗な身体だった。少年は無垢なる遺骸を守って死んだのだろう。
そこには物語があった。少年の物語が。少年と少女の絆があった。それを見た誰もがそれを感じてやまない一枚の絵画のような光景。
一人の少女が、呆然とその光景の前で立ち尽くしていた。美しかった桃色の髪は幽鬼のように乱れており、宝石のようだったとびいろの瞳は泣きはらし血走っていた。
置いて行かれた。少女は置いて行かれてしまった。たったひとりこの世界に取り残された。
少女に声をかけるものがあった。人ではない。猫ほどの大きさの生き物だ。大きな尻尾と耳、雪のように白い毛皮に赤い模様がある。
「いつまでそうしているつもりだい。ルイズ」
少女――ルイズは答えなかった。耳に入っているかどうかも怪しい。うつろな瞳で二人の死体を見つめるばかりだ。

「死んでしまったものは仕方がないじゃないか。君たちの魔法では死者の完全な蘇生はできないんだろう？　君が虚無の使い手だからといってもこの世界の理は覆せない」
「……相変わらず。他人ごとね、アンタ」
ようやく、ルイズは口を開いた。泣き叫んでからせたのか、しわがれた老女のごときかすれ声が漏れる。
「残念には思っているさ。ティファニアは君ほどではないけれど大きな資質をもった子だった。出来れば契約したいと思っていたよ。それももう叶わないけれどね」
ルイズが声にならない叫びとともに杖を降る。杖の先で爆発が起こり、獣の身体が吹き飛ぶ。白い身体からは血は出ず、白い粘土のようなものが撒き散らされただけだった。ルイズはさらに杖を振り続けた。白い何かと土や瓦礫が区別が付かなくなるくらいまで爆破し続けた。
「がは……げえっ、げは」
喉が限界に来たのか、ルイズはその場に倒れこんで咳き込んだ。黄色い胃液と鼻水と涙と涎を垂れ流す。
「まったく、君の癇癪につきあっていたら身体がいくつあっても足りないよ。そういえばサイトも同じことを言っていたね」
どこからともなく白い獣が現れてひょうひょうとした声で言う。
無駄だとは分かっているのだ。これはどうやっても殺せない。生き物かどうかすらわからない。ただそういう存在だと考えるしかないものだった。
この生き物はある日突然ルイズたちの目の前に現れた。人語を話す獣は珍しく、名のある霊獣や精霊の類に違いないと思った。なぜだかこの白い獣を見ることができる者は限られていた。そんな不可思議さもあって、ルイズたちはこの獣がたいそうな精霊だと考えていた。
白い獣はルイズたちに契約を持ちかけてきた。願えば何でも叶うという。望めば力が与えられるという。代償として、魔女という存

在と戦う使命を永劫に背負うことになる。
精霊との契約は古今東西に溢れている。何かを与える代わりに精霊の望みを叶える等価交換。精霊の論理は人間のそれと食い違うことも多く、注意が必要なことだ。精霊との意識の齟齬で痛い目を見た話もたくさん伝わっている。だが、精霊や妖精との契約はそれでも魅力的だ。ただ契約で得られるものだけではない、「精霊と契った」という箔を付けることができるとびきりの宝物だ。
この契約に、ルイズたちは惹かれた。自分たちが契約しようとしている相手が何かも分からずに。
「よく分からないけれど、きみはサイトたちを生き返らせたいのかい？　それなら、僕と契約すればいい。二人だけじゃない。タバサやキュルケ、他のみんなも生き返らせようと思えば可能だ」
みな、願いの代償として散っていった。タバサは復讐という炎に焼かれ契約した。父の仇を打ち名誉を回復したあとは、王として魔法少女として、表から影から、ひたすら国を支え続けた。タバサはもとより一途な強い娘だ。だが、そのがんばりも長くは続かなかった。某国により陥れられたことで、ついに心が折れてしまった。タバサが守ろうとした国は他でもないタバサの手で滅ぶことになる。魔女として呪いを撒き散らす存在となった親友を止めるため、キュルケは契約し散っていった。アンリエッタは国と男という天秤の間で揺れた。どちらを願って契約するか、最後の最後まで悩んでいた。愛しい男が蘇り自分を陥れた経験から、アンリエッタはどうしても人を蘇らせることを選べなかった。国を守るために契約した彼女だったが、それでも愛する男を選べなかったことを悔やみ続けた。その後悔が澱のように重なっていき、彼女の魂を黒く染めた。黒き天魔と化したアンリエッタは、守るべき自国も天空に浮かぶあの国も、愛しい男の眠る湖もすべて破壊し尽くした。
「……シエスタが一番幸せだったのかもしれないわね。魔女になるとも知らずに、無邪気に手に入れた魔法ではしゃいでいたあの子が」
「それは個人の主観の問題だね。まぁ、戦いの中で死んでしまった

彼女をどう見るかは君の自由だ。もちろん君さえ契約してくれるなら、生き返らせて本人に聞くこともできるけれど」
　この生き物は常に人の求めるものをちらつかせて契約を迫ってくる。心が読めるのではないかと思えるくらい、いやらしくこちらの傷をえぐってくるのだ。だが、このときばかりはルイズは鼻で笑った。
「は、はは。アンタ、やっぱ感情ってものが分かってないわ」
「？　どういう意味だい？」
「私が今、なんで涙を流してるか分かってないってことよ」
「サイトが死んだからだろう？　君たち人間は近しい個体が死ぬことを悲しむはずだ」
「違うわ！　全然違うわ！　私はね、私は！　サイトが私じゃない女のために死んだのが悔しいの！　サイトはもう永遠にテファのものだわ。私が何をしようと、たとえアンタと契約しようと！　この事実だけは消えないわ。それがたまらなく悔しくて悲しくて、そんな自分が情けなくって汚らわしくって仕方ないの！」
「彼がティファニアのところに向かったのは単に彼女を守るためだろう？」
「私だって、私だって危なかったわよ！」
「君のそばには他に頼れる人がいた。君のところにサイトが来ても無駄になっただけなんじゃないかい」
「それでも、それでも……私を選んで欲しかったのよ！　私だけを見て欲しかったの！　テファのとこなんかに行ってほしくなかった！　テファが死ぬのも嫌だけど、サイトが私以外の女を守って死ぬのはもっと嫌なの！」
「まったく、わけがわからないよ」
　いつもと同じ口調で、いつもと同じ表情で、そんなことを言う。そう、どれだけ感情をぶつけても意味がないのだ。これにそんなことをしても虚空に向かってわめき散らすのと同じことだ。
「じゃあ、君はどうするんだい。このまま滅びに身をまかせるか、

それともこの不条理を覆す選択をするのか。君が望むなら時間を巻き戻し、最初からやり直すことだって可能だ。君の望むままにサイトやみんなの意識を操ることもできる」
「まっぴらごめんだわ。私はもう、何も要らない」
愛を語らう恋人。楽しく笑いあう友人、家族。無くすくらいなら、失うくらいなら、裏切られるくらいなら、もう何も要らない。
「私が欲しいのはただひとつ。滅びよ！　こんな世界を全て破壊する圧倒的な、完膚なきまでの、二度とよみがえることが出来ないような滅び！」
「……君は、希望ではなく絶望で魔法少女になろうと言うのかい？」
「違うわ、私は魔女になるの。世界を滅ぼす天魔に！」
それがルイズの願いだった。数々の絶望を見てきた少女が行き着いた選択だった。
「いいだろう。ルイズ。君の願いを聞き届けよう。それがたとえ、この宇宙を滅ぼすことになろうとも」
こんなときでも、いつもと変わらぬ調子で白い獣は言った。
ルイズの身体がふわりと中に浮く。胸をはるように仰け反ると、ルイズの胸元から親指ほどのまばゆい光体が出現した。これこそがルイズという存在そのもの。存在を高次から書き換えることで落とし込まれる新たな影。少女の希望の具現。そして、魔女の卵。
「君たちに出会ったときは本当に驚かされた。君や君の仲間たちは考えられないほどの資質をもった子ばかりだった。そのなかでも、君のもつ力は桁はずれだった。どうしてこんなことが起きたのかは僕にも分からない。だいたい国を滅ぼす魔女なんて、そう簡単に生まれるものじゃないんだよ」
その理由は誰もしらない。白い獣も、ルイズ本人すらも。この世界の誰も検討もつかない。
この世界ではない他の宇宙で、ルイズは世界の主人公だった。物語の中心だった。彼女を中心に宇宙が回転していた。その世界を起点に無数の平行世界が誕生していったのだ。当初はルイズの宇宙は

低次に位置するものだった。だが、観測者が増えていくとともに次々と高次の世界へと複製・分裂していった。ルイズは無数の平行世界で数多の使い魔を召喚した。異界の魔神、銀河の英雄、吸血鬼、魔法使い、異星の勇者、数えきれないほど多様な使い魔が生まれその分だけ世界が誕生し、ルイズという存在に因果が蓄積されていった。蓄積した因果が引き寄せたのか、ルイズという存在そのものにひかれたのか、介入を試みる存在も多数出現した。高次の存在である彼らはルイズという存在や世界を改変した。また、自らの化身を送り込んできた存在も多数あった。それらはルイズの世界で我が物顔で振舞ったが、結果としてルイズという存在の因果をさらに肥大化させていった。

ルイズから飛び出た光球が卵のような宝玉へと姿を変えた。うっすらと桃色に輝くそれは、そんな形になってもまだルイズという少女の面影があった。

そして一瞬後。美しかった宝玉は真っ黒にそまった。黒というのもおこがましい、深く禍々しき闇色の玉。絶望で温められた卵。滅びと呪いで満たされた聖杯。希望の光で出来た影。箱庭のように狭い少女の世界の極点。

黒き卵が割れる。毛ほどの細さのわずかなヒビ。それだけで竜巻が起こった。ヒビがさらに広がっていく。大地が恐ろしいほど揺れ、山々が砕けた。かつてルイズだった肉体は嵐に巻き込まれ地割れの中へと消えていく。竜巻は勢いを増し、海に何本もの水の柱を創りだした。うねりたける列柱は、さながら新たな神の降臨のために建てられた神殿だった。

そしてついに、孵る、還る、反る。最悪の魔女が産まれ落ちる。

卵から生まれたモノ。

それは絶望の姿をしていた。魔女の中の魔女。今のルイズは絶望という概念とすら言える。見るものにとっての最悪の絶望の姿として認識される。星に生きる全ての命がそれを見た、聞いた、感じた。その姿を見たモノは絶望のあまり目を潰した。胎動を聞いたモノは

耳を引きちぎった。人が、獣が、エルフが、竜が、魔物が、〈それ〉を感じたことで自ら命を断った。

再誕したルイズの内包する呪いの質量は、すでにこの惑星の限界をゆうに超えていた。星ですら耐え切れぬ途方も無い呪い。小さな生命など存在していられる理由がない。そして今もなお、最悪の魔女は成長を続けている。

魔女が絶叫する。呪いにまみれた産声。次元そのものが揺れるような振動に、それまでかろうじて耐えてきた惑星がついに限界を迎えた。６０００年続いたハルケギニアの歴史と、それ以上にずっと長い星の歴史が終焉を迎える。幽幻な美を誇っていた二つの月も、砂礫のように軽く砕け散る。

最悪の魔女はさらに加速度的に成長を続ける。惑星を衛星を恒星を、星団を銀河を飲み込んでいく。成長速度はさらに増す。すぐに宇宙そのものの成長速度を上回る。もはやこの宇宙そのものが魔女のための巨大な卵だ。太陽も、その何十倍もある巨大恒星も、ルイズのための餌でしかない。

星々を喰らい尽くし限界まで巨大化した魔女はついに宇宙卵より孵る。より高次の存在と成り果てた魔女。次に、魔女はかつて人間だったころの因果を辿り、次々と平行世界を滅ぼし始めた。もはや理由などない。それはそういう存在なのだ。宇宙を喰らってまわる最悪の魔女。満たされることのない空洞を抱えたままさまよい続ける。因果の果てまで。最後の一片まで。喰らうものがなくなれば無限に肥大した自らを喰らい、やがて無に還るのだ。

いくつ世界をくらったときだろう。どれだけの絶望を集めたときだろう。魔女の前に出現したモノがあった。

それは〈希望〉だった。

それは〈夢〉だった。

それは〈愛〉だった。

それは〈幸せ〉だった。

それは〈願い〉だった。

それは、ある少女が求めたひとつの理想だった。
ルイズが魔女の中の魔女ならば、それは魔法少女の中の魔法少女。少女の希望を護る最後の番人。円環の理。
二つの存在が出会ったのは必然だった。魔女は全てを滅ぼすために産まれた。魔法少女は全ての魔女を消しさるために生まれた。相反する白と黒。相克する希望と絶望。相生する聖と邪。
光と闇が激突する。それはもはや戦いですらない。ただ、そういう存在だからぶつかり合う。自然の摂理。
魔女は嘆きを歌う。魔法少女が歓びを叫ぶ。
無限の絶望。夢幻の希望。
魔法少女と魔女はぶつかり合い消し合い喰らい合う。おたがいがお互いを消し去るために。二つの魂が織り成す円環二重螺旋。
無限と夢幻の果て。ゆるりゆるりと〈二人〉がからみ合い溶け合い、やがて一個の球体が生まれる。それは陰陽で構成される世界。太極のカタチ。
二人の世界の中には希望と絶望が混ざり合った混沌があった。やがて混沌から宇宙が生まれた。宇宙は星々を育み、やがて星々には生命の灯が灯る。そしてまた、少女が生まれ絶望と希望の太極へと至る。永遠に続く相克相生の連鎖。
これはありふれたお伽話。どこにでもある、少女たちの神話。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3376t/

魔法少女☆ゼロ魔★マギカ

2011年5月17日20時26分発行